
東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

A Craft Appreciation Class that Involves Expression and Appreciation in Crafts Education : Practices Report in High School Craft Education

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 春菜 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173720

東京学芸大学附属高等学校紀要　59　pp.73～82，2021

工芸教育における表現と鑑賞の関連を図った鑑賞授業のあり方

― 高等学校工芸での授業実践報告 ―

A Craft Appreciation Class that Involves Expression and Appreciation in Crafts Education

― Practices Report in High School Craft Education ―

芸術科（工芸）　神　田　春　菜

＜要旨＞

令和４年度から実施予定の学習指導要領において，表現と鑑賞の相互の関連を図った教育の充実が示されているが，現状では工芸での鑑賞教育は制作の活動に比べると十分に行われているとは言い難い。本校では表現と鑑賞の関連を図った思考力，判断力，表現力等の育成の充実を目指した指導及び評価の研究の一環として，様々な鑑賞授業を実践してきた。本稿は，過去４年間で取り組んだ五つの鑑賞授業の実践報告である。様々な工芸作品を多様な見方や感じ方で鑑賞したり，お互いの意見を共有したりすることで，工芸に対する価値観の変化が現れた。また，「思考・判断・表現等」の資質・能力の育成においては表現と鑑賞の活動をバランスよく配置してカリキュラムを設計する必要がある。そして，限られた時間の中で鑑賞授業の充実させるためには，作品の提示方法や価値観の共有方法の工夫が重要である。

＜キーワード＞　工芸教育　鑑賞　表現と鑑賞の相互の関連　素材　見立て

1　はじめに

1－1　高等学校芸術科工芸における鑑賞教育の現状

令和４年度から実施予定の学習指導要領では，表現と鑑賞の学習に共通に必要となる資質・能力として〔共通事項〕を新設するとともに，表現したり鑑賞したりする資質・能力を相互に関連させ育成できるよう改善が行われている。また，生活との関わりから実感を伴って工芸の働きについて理解を深めることについて課題があることが指摘されている[1]。表現と鑑賞は工芸教育において学びの両輪であるはずが，鑑賞教育の取り組みは十分に行われていないと言える。鑑賞教育の充実は今後の大きな課題の一つである。

元々，高等学校での芸術科工芸の開設率は少ない[2]上に，鑑賞に着目した授業実践報告や事例紹介を検索しても数は少ない。さらに，ものを作ることを通して学ぶという工芸教育の特性上，制作すなわち表現に多くの時間を要することは必然であり，鑑賞の活動の時間を割くことが難しいという現実的な問題もある。そのため，多くの学校では表現と鑑賞の授業のバランスを見た時に，表現の活動の比重が大きいのが現状であろう。

だが，多くの生徒は卒業後，工芸作品を作るのではなく，工芸作品に触れたり日常の中で使用したりする者が大多数であり，本校の生徒もまた同様である。また，工芸作品の多くは目で見て鑑賞するのみではなく，手や口で触れたり，耳で聞いたりとあらゆる感覚を通して「見る」ものである。また，大坪圭輔は日本では古くから「愛で，掌を味わう」という鑑賞行動があることを挙げ，自らを対象に働きかけ，そのよさや美しさを見出し，機能性だけでなく，心地よさを味わうことこそ，生きた鑑賞行動の能力の育成であることを指摘している[3]。

そのような工芸特有の見方や感じ方は何となく見たり触れたりしたり，作ったりするだけでは意識されないものである。実体験を通した工芸の鑑賞を積み重ねることで，初めて実感を伴った見方を獲得し，感じ方も変化していく。

加えて，多くの伝統工芸は担い手不足のため数十年後には途絶えてしまう可能性が高い。地域ごとに多様な文化を生み出してきた工芸の伝統は，多様性を尊重する時代だからこそ，今後益々重要なものとなってくる。生涯を通じて工芸の伝統や文化に愛着や関わりを持ってもらうためにも鑑賞するという経験は欠かせないものである。

このように，単に学習指導要領で重点を置かれているからではなく，生徒の実情や社会的な背景からも鑑賞教育の充実は必然であると言える。

1－2　本校での鑑賞授業の取り組み

鑑賞授業の見直しが求められる中，本校では，平成28年度から令和３年度にかけての国立教育制作研究所

の教育課程研究指定校事業において，表現と鑑賞の関連を図った思考力，判断力，表現力等の育成の充実を目指した指導及び評価の研究に取り組んできた[4]。

表現と関連付いた鑑賞の活動と言われると，完成した作品の相互鑑賞会や制作前の参考作品の鑑賞がイメージされるだろう。相互鑑賞に関しては実際に制作した作品を使用したり，作者の考えを直接聞いたりでき，見方や感じ方を深める上で重要な活動であり，多くの学校で取り入れられている活動と言えよう。本校の工芸の授業においても毎題材に取り入れている。

一方で制作前の参考作品や制作技法について理解するための鑑賞は，工芸の見方や感じ方を深めることではなく，どちらかと言えば，制作のために必要な事項を学ぶ過程であり，学習指導要領で「B 鑑賞」の指導事項として挙げられている内容とは異なるものと言えよう。

この研究では〔共通事項〕の指導事項を軸として工芸作品を鑑賞し，見方や感じ方を深めることで，表現の活動における発想や構想の場面においても造形的な視点から捉えて考えることができる力を育てることを目指して，様々な鑑賞の授業に取り組んできた。

1－3　本稿の目的

本稿では，工芸の鑑賞授業の事例が少ない実態を踏まえ，より多くの学校で充実した鑑賞授業が実践できるよう，研究を通して取り組んできた五つの鑑賞授業について実践報告する。特に，単独での鑑賞授業や発想や構想の前次に取り組む鑑賞授業を中心に取り上げた。

実践報告は，題材のねらいと指導の工夫について，生徒の反応の二つの項目でまとめている。ページ数の関係ですべての指導案を掲載することが難しいため，最低限ではあるが授業の概要と授業展開について表の形で掲載した。また，鑑賞の授業で使用した作品やアプリケーションも一部紹介しているので，参考にしていただきたい。また，表現と鑑賞の関連付けについて，授業実践１と２に関しては前後の授業で取り組んだ表現の活動との関わりについてまとめてある。

2　工芸の鑑賞授業の実践報告

2－1　授業実践１「見立て」をキーワードとした鑑賞

2－1－1　題材のねらいと指導の工夫

生徒に「工芸作品と言われてイメージするものは」と問いかけると，ほとんどは日常の中で使われる道具であったり各地域に古くからある伝統工芸品であったりする。

しかし，近代以降の工芸作品には素材の持つ特性や技法が生み出す表現のおもしろさなどを生かして制作された鑑賞をメインとした工芸作品が多く存在し，工芸の多様性を担う存在である。また，作品の制作にあたり素材の特性を生かして発想や構想をする場面では，形状や色彩に比べて素材に意識を向けることは生徒にとっては馴染みが少なく，印象のみで捉える場面が多く見られる。

鑑賞をメインとした工芸作品を鑑賞することは，工芸に対するイメージが変化するとともに，素材の魅力に着目してより広い見方や感じ方ができるようになることが期待される。そのため，本題材では工芸の持つ美しさとして素材による表現の多様さに焦点を当て，「見立て」をキーワードに素材の拡大画像や現代の工芸作品の画像を用いた鑑賞の授業を実践した。

前半の展開では茶陶を例に挙げ，日本には古くから素材の変化によって偶然生み出された質感や形，色などを，何かに「見立て」て鑑賞する文化があることを紹介し，「見立て」を通して部分と全体それぞれに着目させ，造形のはたらきについて理解することを目指した。この部分と全体の理解は〔共通事項〕の内容の理解と関連付けている。後半の展開では現代の工芸作品を提示し，前半部で気付いた視点を踏まえ全体のイメージから部分で分析する。そして，作者の素材の捉え方や表現の意図と工夫などについて考え，工芸の見方や感じ方を深めることを目指した。詳しい授業の概要と授業展開は表の通りである（表 1,2）

指導の工夫として，素材の表情の違いについて感じ取れるよう高解像度の画像を大きな液晶ディスプレイで映したり，質感の異なる実物のやきものを準備したりした（図1)。また，それぞれの感じ方を否定しないよう双方向でのやりとりを中心に授業を展開できるようリアルタイムでアンケートを集約できるアプリケーションの Mentimeter を用いた（図２)。

表１　授業実践１　授業の概要

題材名：工芸の美しさって何だろう？～素材の表情に着目して鑑賞しよう～
実施日：平成 30 年 10 月 30 日（全２時間，50 分を２回連続で実施）
対象生徒：第一学年 工芸Ⅰ選択者
本時のねらい：工芸の多様な表現に関心を持ち，素材が変化のする中で偶然生まれる形や色，質感などの造形的なおもしろさなどの工芸作品のよさや美しさ，作者の素材の捉え方や表現の意図と工夫を感じ取り，分析し，作品についての考えを持ち，工芸の美しさや，社会や生活への工芸の働きについて理解を深める。

表２　授業実践１　授業展開

導入20分	・五つ作品（やきもの）を提示し，〇か×かを回答する。 *提示した作品：安土桃山時代 伊賀耳付水差　銘「破袋」，八木一夫 1954 ザムザ氏の散歩など* ・用途の明確でない作品も提示することで何が工芸作品であるかについて疑問を持つ。 ・見方の一つとして，素材を「見立て」ることを提示し，工芸の美しさについて考えることを伝える。
展開①30分	<u>Part1　素材に着目して表現しよう</u> ・工芸作品を何かに「見立て」て鑑賞する文化について学び，それぞれの価値観で鑑賞することの大切さを理解する。 ・作品の一部を拡大したもの（素材のテクスチャー）を提示し，それが何に見えるかをアンケートツールで回答し，お互いの感じ方を共有する。 *提示した作品：南宋時代 曜変天目茶碗 など* <u>Part2　作品全体のイメージに着目して鑑賞しよう</u> ・「見立て」は素材のテクスチャーだけではなく，それも含めた全体のイメージから行っていることについて理解を深め，価値観の多様性と工芸作品を鑑賞するおもしろさを感じる。 ・工芸作品を提示し，それが何を表現しているかをアンケートツールで回答し，お互いの感じ方を共有する。 *提示した作品：安土桃山時代 志野茶碗「卯花墻」，橋本真之 1982-83 重層運動膜（内的な水辺）など*
展開②40分	<u>Part3「これから鑑賞する工芸作品が何を表現していると感じるか？素材や全体のイメージをよくみて，感じ取ったことを分析的に言葉で表そう」</u> ・現在活躍する作家の工芸作品を高解像度の画像で鑑賞し，感じたことの根拠をまとめ，生徒同士で共有する。 *使用した作品：桑田卓郎 2013 垙/Bowl 磁土 釉薬，細野仁美 2014 珊瑚礁のボウル 磁土，齋藤まゆ 2012 種 磁土，田中知美 2014 とってのあるかたち 陶土*
	①静かに作品をよくみる ②作品を鑑賞して感じ取ったこと（≒見立てたこと）を思考ツール（マインドマップ，マンダラート，フィッシュボーンチャート，クラゲチャートから任意のものを選択）を用いて分析し，ふさわしい「タイトル」（≒銘）をつける（図３） ③ワークシートの裏面にタイトルと分析したことを文章でまとめる ④感じ取ったことを発表し合う 【発表者】思考ツールを提示しながら，タイトルと分析したことを相手に伝える 【聞き手】相手の話す内容をよく聞く ・それぞれが出した意見を基に，感じ取ったことの共通点と相違点をまとめ，その作品が持つ工芸の美しさや，私たちの生活や社会の中での工芸の働きについて考え，ホワイトボードにまとめる。
まとめ10分	・各グループまとめたことを，ホワイトボードを用いて発表し，意見を共有する。 ・本時の振り返りをワークシートに記する。



図１　やきものの見本



図２　Mentimeter を用いた意見共有

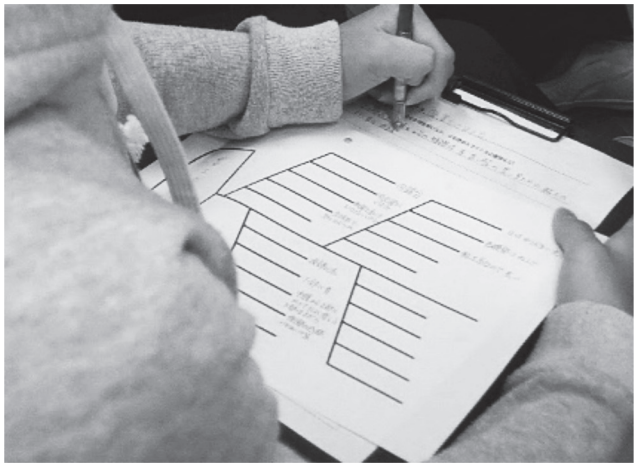


図３　思考ツールを用いた分析の様子

２－１－２　生徒の反応

鑑賞授業前のアンケートにおいて作品を鑑賞することに対するイメージについて自由回答（58 名回答）させたところ「制作者の思いを感じ取ること」「工芸品を見たり触ったりし、美しさや奥深さ、面白さを感じる」「伝統工芸品を見る」「他人が使った技術などを見て学び、自分のものにしていく活動」など回答があった。鑑賞活動に対し好意的なイメージを持っている者が多かった。鑑賞授業後は，今までと異なる見方で鑑賞することや他者と考えを交わしたり，作者の作品に対する考えに触れたりすることで，自分の見方や感じ方が変化することや，鑑賞活動の意義を感じ取っていた。そして，その活動は自身の表現活動にも影響を及ぼしていくと実感していた。

〈生徒の振り返りの一部〉

・写真から自分で考えたイメージと作者が伝えたかったものとは同じところもあり，違うところもあって作者が表そうとしていること以外にも見る人に伝わることがあると学んだ。一つの作品の見方はとてもたくさんありどのような観点から見るのかというのとその人の感性がどのような印象を受けるかを決めると感じた，第一印象とじっくり鑑賞して得るものは少し違うのでどちらも大切にした上で作品をみたいと思った。

・世間的にすごく良く評価されている工芸家の作品は，正直何が何だかわからないものが多い。よく「これぐらいなら自分にも作れるよ（笑）」などと失礼なことを思ったりもする。だがその作品は，その工芸家が見た目の美しさや実用性を熟考した末に作り上げた，世界でたった１つのものである。だからこそその工芸家は偉大なのだ。そうは言ってもやはり，詳しく説明されないと作品に込められた本当の想いは分からない。では自分たちは”鑑賞”をすることによって何ができるのか。それは，”鑑賞した作品から自分が何を感じ，それを自分の創造にどう活かすのかを考えることである”とぼくは思う。なぜなら，そこに正解はないからだ。

・日本ではるか昔から行なわれていた，偶然の産物である形・色などの「景色」を何かに「見立て」ることは，想像・創造力を高め，よりおもしろい作品を産み出すことにつながるというとこを学んだ。また，鑑賞でも制作同様に作品との「対話」することが大切で，どう感じたか他人との共通点差異点を見い出すことも鑑賞のポイントである。

２－１－３　表現との関わり

この年のカリキュラムでは，授業実践１の鑑賞授業前に木材の特性を生かした身近で使用する小箱の制作に取り組み，鑑賞授業後に使い手を想定した食卓で用いるやきものの制作に取り組んだ。ある生徒は，身近で使用する小箱の制作において，機能と形状の関わりのみに着目していたが，使い手を想定したやきものの制作においては，形状だけではなく，やきものならではの特徴を意識して発想や構想をしている記述が見受けられた（図 4）。すべての生徒に言えることではないが，素材の魅力を生かすという見方が深まったことで，発想や構想の場面において変化が生まれたと考えられる。



図４　発想や構想の変化

一方で，依然として機能的な形状のみに着目したまま構想が深まらない生徒もいた。しかし，鑑賞の場面にお

いては様々な視点から工芸作品を十分に捉えられている場合も多く，1回の授業で学んだ成果がすぐに現れるものでもない。生徒一人一人の「思考・判断・表現等」に関わる資質・能力を育て，評価していくためには，多様な学習場面を用意する必要がある。やはり，年間のカリキュラムで表現と鑑賞の活動をバランスよく取り入れて，長期的に変容を捉えていくことが大切である。

2－2　授業実践２　空間との関連から捉える鑑賞

2－2－1　題材のねらいと指導の工夫

工芸は人々の生活にどんな影響を与えるものか。笹山央は，工芸の役割は「当座，売れることに直結するとは限らないが，市民の生活文化にプラスの方向で影響を及ぼしていく可能性のあると予測されるもの」であり,「そのような意味でのいいものを作ること」であると言っている[5]。本実践は，社会における工芸の役割をプラスの効果をもたらすものという考えから出発し，人々の心にプラスの効果をもたらす空間を生み出す照明器具のデザインを考え制作することを大きなねらいとしたものである。

工芸作品は古くから装飾のためだけでなく，他者をもてなすための空間作りの役割も果たしてきた。特に日本ではその季節に合わせたものを床の間に飾る文化がある。空間との関わりから捉えることは，工芸の伝統や文化を知る上でも欠かせない取り組みである。

一方で，発想や構想の過程において空間と作品の関係性を捉えるとはどういうことか悩む生徒も多いのではないかと予想される。そのため，空間と工芸作品に関わる文化に着目し，工芸作品を空間に置くことでどのようにイメージが変化するかを考えることをねらいとして鑑賞の活動を取り入れた。詳しい授業の概要と授業展開は表の通りである（表3,4）作品に関しては，技法や様式の異なるものを選ぶとともに，置かれる空間がイメージできるよう使用場面の写真を提示した上で鑑賞に取り組んだ。

表３　授業実践２　授業の概要

題材名：人々の心にプラスの効果をもたらす空間を生み出そう～［金工］透し彫り技法を生かした照明器具の制作～
実践年月日：令和元年10月11日（全16時間中1時間（2回目の授業））
対象生徒：第二学年 工芸Ⅱ選択者
本時のねらい：空間と工芸の関わりについて関心を持ち，工芸作品の造形的な特徴が空間にどのような印象を与えるかについて考察する。

表４　授業実践２　授業展開

導入5分	・前回の授業内容を振り返りながら，本授業では工芸作品と空間の関係性について考える鑑賞の活動に取り組むことを伝える。
展開30分	Part1　工芸作品が空間に与える効果を考えよう ・空間と工芸の関係性について，代表的な事例や作品を提示しながら歴史的な変遷について説明する。 祈りの空間，居住空間の装飾，もてなしの空間 →それぞれの場に合わせて，工芸作品が置かれたことに注目する Part2　応接室に置く工芸作品を選び，配置しよう ・12種類の工芸作品を提示し，その中から人を出迎える空間としてふさわしい工芸作品を選ぶ。なぜその作品を選んだのか，造形の特徴（形状，色彩，模様，素材…）と関連付けてワークシートに理由を記述する。
まとめ15分	Part3　お互いの意見を共有しよう ・3～4人のチームになり，お互いの選んだ作品とその理由を発表する。（図5） ・お互いの意見を共有し終えたら，選んだ理由の共通点と相違点をワークシートにまとめる。 ・本時の振り返りをワークシートに記入する。



図５　お互いの意見を共有している様子

2－2－2　生徒の反応

多くの生徒は，自分の好みから作品を選ぶのではなく，来客者をもてなすという客観的な視点に立ち，作品の置かれた空間から来客者に与える感情を想像し，作品の造形の要素を分析的に捉えることができていた（図6）。

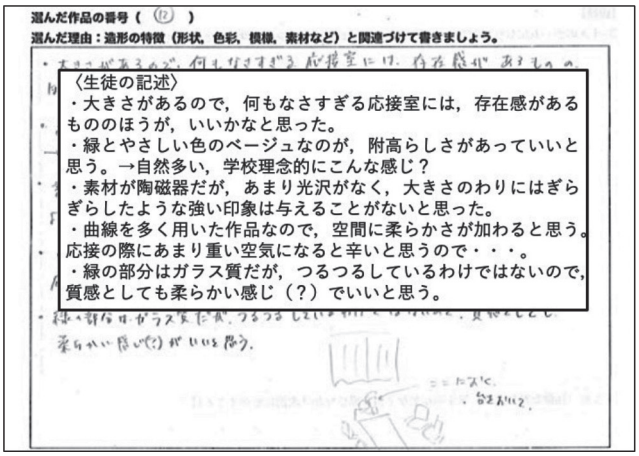


図6　ワークシート

2－2－3　表現との関わり

この題材は，透かし彫りの技法を生かした照明器具を制作することが活動の中心である。鑑賞を行ったことにより，漠然とアイデアを出していた生徒の一部では，具体的な使用場面を想像した上で発想したり，場面にふさわしい造形となるよう構想を工夫したりする様子が見られた。

作品の下図が完成した段階で，鑑賞を通して学んだことを改めて振り返させた際にまとめた記述からも，空間との関わりから工芸作品を捉えている様子が読み取れ，見方や感じ方が深まっている。

〈生徒の振り返りの一部〉
・工芸品1つでそんなに変わるのかと今まではそこを考えもしなかったが自分で工芸品を作るとなると小さな部分までも工夫して制作した。製作者側は色々考えて試行錯誤して作品を作り上げていても使う人には伝わりにくいと感じた。工芸品は置かれているだけのはずなのにその工芸品の輪郭や色質感形でその周りの雰囲気を落ち着かせたり少し華やかにしたりする効果があると感じた。今回の金工では照明だけならただ明るくする役割なのにその周りに透かし彫りをした金属の囲いを置くことで照明自体の見た目だけでなく部屋にうつる透かし彫りの模様を楽しめて部屋全体が工芸品になっていると実感した。
・今までの工芸では機能美を工芸作品そのものに求めていた感じがしたが今回は工芸作品によって生み出される空間をデザインした。今回の作品は特に色をつけず光を遮ることで生み出されるデザインで工芸というのはただ作品を作るだけではなくその作品から生まれる空気まで含めて作品の一部なのだと思った。

一方で最終的な成果物は新型コロナウイルス感染防止のための休校措置により，作品が完成することなく授業が終了してしまった。本来であれば，実際に灯りを点けて空間と工芸作品の関係性について見方や感じ方を深める予定であった。

2－3　授業実践３　手を通して見る鑑賞

2－3－1　題材のねらいと指導の工夫

授業実践１で紹介した題材の反省点として，工芸作品を「あらゆる感覚」を通して「見る」という活動が乏しかったことが挙げられる。そのため，次年度においては，実際に触れ，体感的に鑑賞することを軸とした鑑賞の活動も取り入れた。詳しい授業の概要と授業展開は表の通りである（表 5，6）

表５　授業実践３　授業の概要

題材名：工芸の美しさって何だろう？～素材の表情に着目して鑑賞しよう～ **実践年月日**：令和元年11月23日（全4時間中2時間（1,2回目の授業），50分を２回連続で実施） **対象生徒**：第一学年 工芸Ⅰ選択者 **本時のねらい**：主体的に工芸の鑑賞の活動に取り組み，対象や事象を捉える造形的な視点について理解を深め，身近な生活の視点に立ってよさや美しさを感じ取り，作者の心情や意図と制作過程における工夫や素材の生かし方，技法などについて考え，見方や感じ方を深め，生活や社会を心豊かにするために工夫する態度を身に付ける。

表 6　授業実践 3　授業展開

導入10分	Part1 作品との出会い ・18種類の飯碗を一通り見て，その中で使いたいと思ったお気に入りを３つ選び，その理由をワークシートに記述する。（図7） *使用した作品：会津本郷焼，益子焼，美濃焼，有田焼など*

展開70分	・形や色だけではなく，素材や重さ，フィット感など手を通して作品を捉えることを確認する。 Part2 作品を「手」で鑑賞する ①テーブル上にある作品（3つ）を一つひとつ手に取り，じっくり鑑賞する（図7） ②鑑賞した作品のうち気になったものを2つ選び，ワークシートに「好き・嫌い」「自分が普段使っている茶碗と比べてどんな気持ちになるか？」をまとめる（図8） ③改めて手に取り，部分に着目して鑑賞し，その気持ちになる「理由」を部分と関連付けてまとめる ・テーブルを移動し①から③を計6回行う。（全18種類の作品を鑑賞し，12種類の作品についてワークシートにまとめる） Part3 作品を鑑賞した上で改めて… ・全ての作品を鑑賞した上で使いたいと思ったお気に入りを3つ選ぶとともに，最初に選んだ時との基準の違いを書く。
まとめ20分	Part4 お互いのお気に入りを紹介しよう ・3-4人のグループになり，鑑賞を通して選んだお気に入りの作品の一つを紹介する。 ［紹介の方法］ ①発表者は選んだ作品とその理由について説明する ②聞き手はその作品について自分はどう評価したか伝える Part5 まとめ ・今回の「手」による鑑賞を通して学んだ「工芸の美しさ」や「工芸の美しさ」が私たちの生活に何をもたらしてくれるかについて自分の考えをまとめ，Google classroomに投稿し，お互いの意見を共有する。 ・本時の振り返りをワークシートに記入する。



図7　手にとって鑑賞している様子

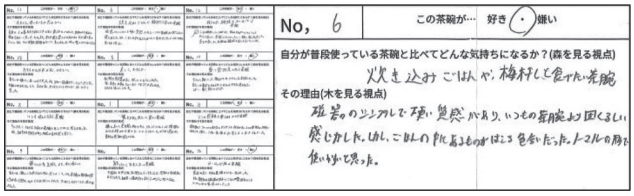


図8　ワークシート（左：全体，右：一部）

2－3－2　生徒の反応

着眼点を押さえ，実際に作品に触れ鑑賞することで，見た目の形状や色彩だけでなく，厚みや触り心地などに意識を向け発想や構想をすることに繋がっている様子が見受けられた[6]。最終的にどこまで意識して制作できたかを制作後の鑑賞の活動の中で見取る予定であったが，新型コロナウイルス感染防止のための休校措置により，作品は完成しつつも，完成作品の鑑賞機会を失くしてしまった。

2－4　授業実践4　授業実践3の課題を踏まえ改善した授業実践

2－4－1　題材のねらいと指導の工夫

授業実践3では，用意した作品の数が多かったこともあり，素材の性質や技法の特徴など陶芸に関わる基礎知識のない状態で鑑賞を展開したことが課題として挙げられる。カリキュラム上，鑑賞の活動後にやきものに関わる基礎知識について学ぶ時間を設けていたが，最低限の基礎知識のある状態で作品を鑑賞する方がより気付きが増え，多様な見方をすることができたのではないか。そのため，令和3年度では授業実践3の授業展開に改善を加えて鑑賞の授業を実践した。

この題材はA表現(2)社会と工芸の内容として取り扱う「人々の生活を心豊かに演出する～【陶芸】キャンドルスタンドの制作～」という題材の導入として，制作者の気持ちや思いをやきものの表現を生かした形で発想や構想をできるよう，やきものの見方や感じ方を深めることをねらいとしたものである。そのため，本題材では最終的には人々の生活を心豊かに演出するキャンドルスタンドを制作することが大きなねらいであるが，あえて異なるやきものの作品（飯碗）を提示することで素材の特性に着目して鑑賞できるように設定している。

この授業のねらいについては授業実践3のものと大きな違いはないが，見方を広げられるよう素朴な疑問やお互いの気付きを共有する活動を通して工芸作品の持つよさや美しさがどこにあるのか見方を広げるとともに，工芸作品の持つ魅力について理解を深めることにより重点

を置いた。そして，再度作品を鑑賞することでこれまで気付くことができなかった部分に着目して見方や感じ方を深めることを目指した。詳しい授業の概要と授業展開は表の通りである（表7,8）

ここでは，お互いの意見を共有しやすいように電子ホワイトボードであるGoogle Jamboardを利用した。

表7　授業実践4　授業の概要

題材名：人々の生活を心豊かに演出する～【陶芸】キャンドルスタンドの制作～ **実践年月日**：令和3年11月8日（全24時間中2時間（1,2 回目の授業），50分を2回連続で実施） **対象生徒**：第一学年 工芸Ⅰ選択者 **本時のねらい**：陶芸作品のよさや美しさを感じ取り，形や色，素材などの性質やそれらが感情にもたらす効果，造形的な特徴を基に全体のイメージで捉えることを理解したり，作者の心情や意図と制作過程における工夫について考えたりする。

表8　授業実践4　授業展開

導入5分	身近にあるやきものについて質問をし，これからやきものの作品を鑑賞していくことを伝える。
展開85分	Part1 やきものの魅力を探ろう（45分） ・並べられた9つのやきもの（飯碗）を見たり触ったりして鑑賞し，魅力的だと感じた作品を一つ選び，気に入った部分と疑問に思った部分をワークシートに記述する。 *使用した作品：会津本郷焼，益子焼，美濃焼，有田焼など* ・Google Jamboardを開き，自分の選んだ作品の画像があるボードを選び，ワークシートに書いたことを基に，気に入った部分をピンク色の付箋に，疑問点を水色の付箋に書き出し貼り付ける。 ・同じ作品を選んだ人同士でグループに分かれ，それぞれが出した意見を同じ属性ごとに分類する。 Part2 やきものについて知ろう（15分） ・Part1で出た疑問点に答える形で，やきものの特徴（釉薬や貫入など）や制作工程，サイズ感と形の関わりなどを動画や実演等を交えた説明を聞きながら，重要だと思った部分について適宜ワークシートに記録する。 Part3 さらに分析をしてみよう（25分） ・再度，最初に選んだ作品を鑑賞し，そのよさや美しさについて部分と全体に着目しながら分析をし，ワークシートに記述する。 ・Google Jamboardを開き，自分の選んだ作品の画像があるボードを選び，ワークシートに書いたことを基に，分析したことを黄色の付箋に書き出し貼り付ける。
まとめ10分	・Google Jamboardに書いた内容をお互いに読み，考えを共有する。 ・本時の振り

2－4－2　生徒の反応

生徒がGoogle Jamboard上に書き出した内容を見ると，Part1の段階で，見た目や触り心地から愛着や美しさを感じた部分を挙げることができた（図9）。また，他の人たちと共有することで同じ着眼点でも違う感じ方をしたり，自分にはない着眼点に気付いたりしながらやきものの魅力をまとめることができた。一方で，釉薬が生み出す質感や制作方法に疑問を持った生徒が多かった。

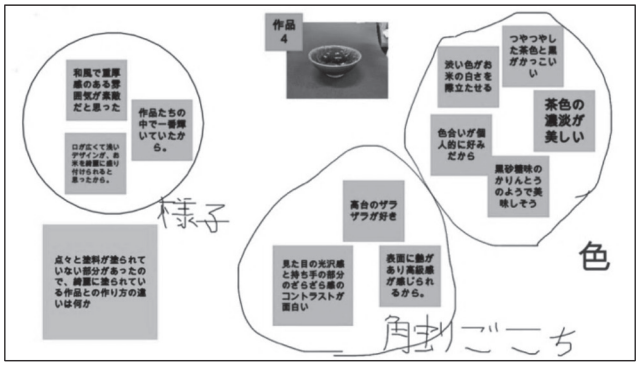


図9　Google Jamboard上に書き出されたもの

Part2を経てPart3で再度の鑑賞を行なったが，質感が生み出す特徴やサイズ感などの分析を深めている生徒がいた。一方で，Part1において「気に入った理由」を分析した時点で，多様な視点から捉えており，思ったほど記述内容に大きな変化が現れなかった，もしくは，一言二言で分析が終わってしまたという生徒も多かった。Part3の場面における問いかけに課題が残った。

また，鑑賞するのに時間がかかり，Part3でまとめた内容を共有することができなかった。次回以降は共有で

きるよう時間配分の工夫していきたい。

2－5　授業実践５オンラインによる鑑賞の課題

2－5-1　オンライン課題のねらい

令和２年度以降，新型コロナウイルス感染防止対策として休校や分散登校となり，オンラインで授業を行う機会が急増した。制作を行うことは場所や用具等の関係で困難な一方，鑑賞に関しては改めて自分の身近にあるものに目を向けるいい機会となった。ここでは，オンラインで提示した鑑賞の課題を紹介する（表９,10）（図 10）。

表９　授業実践５　課題の概要

課題名：身の回りの道具の造形について考えよう～にぎる～ **実践年月日**：令和３年５月 28 日～９月９日 **対象生徒**：第一学年 工芸Ⅰ選択者 **課題のねらい**：「にぎる」という動作に着目して身の回りの道具を観察，分析，考察することで，機能的で美しい造形のための工夫がどのように行われているのかを感じ取り，工芸作品の見方や感じ方を深める。

表 10　授業実践５　提示した課題の内容

①　課題の趣旨を説明した動画を視聴する ②　以下の項目について共有した Google document のファイルにまとめ提出する ・「にぎる」動作を伴う道具を 10 種類探す ・３つに絞りよく観察し，機能的で美しい造形のための工夫について「形状」「サイズ感」「重さ（重心）」「触り心地」の四つの観点でそれぞれを分析，考察をする（道具の写真も入れること） ・身の回りの道具を観察，分析，考察して気付いたことと感想をまとめる

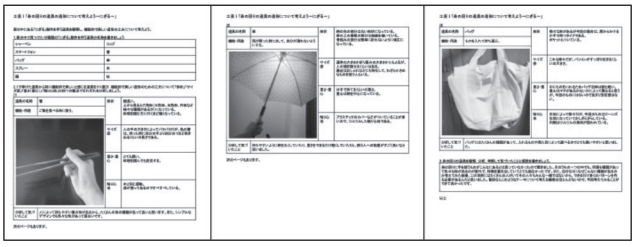


図 10　生徒提出物

2－5－2　生徒の反応

この課題は，工芸Ⅰの教科書『工芸Ⅰ』（日本文教出版）20-21 頁の「にぎる－手と道具」を元に考案したものである。生徒の振り返りには「今まで気付かなかった視点で身近な道具を捉えることができた」等の記述が多く見られ，身近なものをいつもと異なる視点で捉えることに新鮮さを感じ，改めて分析することで普段は気付かない工夫を発見できたことに対し，驚きを抱いていた。裏を返せば，意識的に着目させなければ気付くことが難しいと言える。改めて表現と鑑賞の活動のバランスの重要性に気付かされた課題であった。

3　考察

ここまで，五つの鑑賞授業を報告してきたが，最後に，表現と鑑賞の関連を図った鑑賞授業を充実させるために，どのように鑑賞授業を設計していくべきかを考察する。

3－1　カリキュラムにおける表現と鑑賞のバランス

すでに述べたように，表現と鑑賞をバランスよく取り扱うことは生徒の「思考・判断・表現等」の資質・能力を育成する上で重要である。しかし，制作の時間を確保していく上で，カリキュラムの中でどの程度鑑賞の時間を割くことができるかは難しい課題である。本校での今年度の工芸Ⅰ（第一学年）表現と鑑賞の配置のバランスは表の通りである（表 11）。

表 11　2021 年度工芸Ⅰ（第一学年）のカリキュラム

時期	領域	時数	主な学習内容
1学期	B 鑑賞	2	オリエンテーション
	A 表現(1) /B 鑑賞	10 2	素材を生かすことに着目し，積層技法を用いた身近な生活で使用する小物置の制作と木工作品や完成作品を鑑賞し見方や感じ方を深める
	B 鑑賞	6	分散登校によるオンライン課題
2学期	A 表現(1) /B 鑑賞	3 3	（実習生授業）日本の伝統文化について見方や感じ方を深める題材
	A 表現(1) /B 鑑賞	5 1	1 学期の続き
	A 表現(2) /B 鑑賞	10 2	人々の生活を心豊かに演出するという視点からの，陶芸技法を用いたキャンドルスタンドの制作と陶芸作品や照明器具，完成作品を鑑賞し見方や感じ方を深める
3学期	A 表現(2) /B 鑑賞	10 2	
合計	A 表現	38	
	B 鑑賞	18	

本年度は分散登校によるオンライン課題がありＢ鑑賞の活動が少し多いが，通常授業であれば制作の時間に割り当てる予定であった。意識的に取り入れたとしてもやはり時間が足りない。そのため，少ない時間の中でより充実した鑑賞授業を行うことが求められる。よりよい鑑賞授業を実現するためには，取り扱う作品の種類のバランスと考えの深め方や共有方法の工夫の二点は特に重要であり，鑑賞授業を設計する上で鍵となる部分であると感じた。その点について考察する。

3－2　取り扱う作品のバランス

工芸においてどの素材，技法を用いた作品を取り扱うかは大切であるが，それに加えてどのような目的で制作された作品であるかも鑑賞する作品選びにおいてとても重要である。例を挙げると，日常生活の中で道具として使用するモノ，伝統技法を継承して磨かれた技で作られたモノ，素材の質感や魅力から自己の表現を追求したモノなどがあり，それぞれ目的が異なるが，どれも工芸作品である。これは工芸作品や工芸の伝統や文化の多様さを象徴するものであると言えよう。それらのうち，いずれかに偏ってしまっては工芸の伝統や文化の一部しか伝えていないことになる。限られた時間の中でも，より多くの価値観に出会えるよう作品を選んでいくことが大切である。

そして，工芸作品を提示する上でも，それぞれの分類ごとに最適な形があるだろう。例えば，生活の中で使用する工芸作品は，使うという視点からも実際のものを手に取り鑑賞してこそ，作者の工夫を読み取ることができる。一方で自己表現を追求した鑑賞メインの工芸作品は，作品そのものを授業で提示することは難しいため，なるべく細部を捉えられる高解像度の画像や素材感のわかる素材のサンプル，大きさや重さをイメージできるような資料などを用意することで，多様な視点で鑑賞を行うことができる。何に着目して鑑賞するかによって作品の選定や提示の仕方を工夫していくことで，少ない時間の中でも，より質の高い鑑賞の活動が展開されることが期待できる。

3－3　考えるためのツールの工夫

鑑賞授業においては，他者の価値観に触れ，見方や感じ方を深めることができることが大きな特徴であろう。今回の授業実践においては，グループワークや全体発表を通して意見の共有を行った。その際，同じ時間，同じ活動であってもICT機器を活用することで，より多くの生徒の意見を拾ったり，触れたりする機会が増えた。自分自身では気付かない見方や自分とは異なる価値観に触れるために，ICT機器は積極的に活用していくべきであろう。

一方で，自分の考えを深めていくには紙のワークシートに書き出す方がマインドマップや図などでまとめやすく，書き出してから考えをまとめやすい。また，動き回りながらの鑑賞も行いやすい。どちらか一方で授業を展開するのではなく，個人やグループ，全体などそれぞれに合った手法を用いて活動に取り組めるよう工夫していく必要がある。

4　おわりに　―今後の課題―

今回の授業実践のまとめの振り返りとして，表現と鑑賞の相互の関連を通した生徒の学習の深まりに長期的に捉えることは不十分なところも多かったことが挙げられる。また，本稿では評価方法についてもほとんど触れることができなかった。今後の課題としてカリキュラムを通しての生徒の変容の調査や鑑賞授業のよりよい評価のあり方に関する研究を行い発信していきたい。

引用文献・参考文献・注釈

1. 文部科学省（2019）『高等学校学習指導要領（平成30年度告示）解説 芸術（音楽，美術，工芸，書道）編 音楽編 美術編』頁6-7参照
2. 平成27年度の文部科学省の調査において普通科1年次の工芸Ⅰの開設率は3.2％であると示されている（「平成27年6月9日 教育課程企画特別部会 資料3－1高等学校の教育課程等に関連する資料（データ集）」https：//www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/__icsFiles/afieldfile/2015/08/04/1360076_3_1_01.pdf,R3.8.1時点 参照）
3. 大坪圭輔（2017）『工芸の教育』武蔵野美術大学出版，頁286
4. 詳しくは文部科学省国立教育政策研究所のHPに掲載されている研究成果報告書を参照（https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shiteikou.html,R3.8.1時点）
5. 笹山央（2014）『現代工芸論』蒼天社出版，頁11
6. 「教科等横断的な視点からの教育活動の改善：「学習評価」を軸としたカリキュラム・マネジメント 第18回公開教育研究大会を受けて」東京学芸大学附属高等学校 研究紀要 57（2020）頁116-117を参照，生徒の反応や表現との関わりの詳細についてはこちらに詳しくまとめてある